

---

# 碧翼の輪廻

幽明鏡華

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

碧翼の輪廻

### 【Nコード】

N7604N

### 【作者名】

幽明鏡華

### 【あらすじ】

天変地異によって退廃した大陸。現れた異形の生物を退治するこ  
とで生計を立てる女性が、喪失の過去と向き合いつつ紡がれる空の  
ストーリー。

パソコンで投稿しています。携帯だと文章の途切れ方が不自然に  
なる可能性が出てきますので、ご了承ください。

## Scar of mind (前書き)

これは以前にも投稿を試みた作品でしたが、折悪く断念してしまったものです。

今度こそは完結を目指して頑張って行きたいと思います。

諸注意。

創作で生まれた団体名その他単語を使用しております。

現実存在するものとはまったく関係が無く、また他者の著作を脅かすものではありません。

## Scar of mind

失ってから「こと」の大切さに気付くケースなんて、この世にはごまんと溢れている。大切なのは、失ったものに対してどんなけじめをつけるかだろう。

代わりのものを見つけるもよし。心に穴が空けたまま、哀悼と傷つく決心のもとに世を過ごすもよし。

人は得てして弱いモノであるから、誰がどんな逃げ方をしても非難をされるべくもない。しかし、ひとはまた、自分で自分を許せなくなることもある。それがけじめをつけられない時だ。

心のわだかまりを消し去るには、傷つきひねくれている自分と向き合うほかはない。ただ、それは難しいことだ。誰しも出来ることではないし、時に膨大な時間を代償として奪ってゆくこともある。

人が生きていくにあたって、失うことは避けられないし、それから逃げるのにも限界が来てしまう。どこかで始末をつけなければならぬ。

——これは喪失感に追われて逃げ続けていた女性の、けじめの物語。

## 第一話    s c a r    o f    m i n d    -    1

十、

最初街中で「それ」を見つけた時、レアン・シュレイフは訝しげに膝を突いて、まじまじと観察を始めたのだった。

紅と白の派手なぼろきれ——ではない。路上の隅に申し訳なさそうに転がっていたそれは、紛う方なき人間であった。

生き倒れだろうか。「それ」はかなり弱っているようで、突っ突こうがド突こうが一向に反応を示さない。

普段ならおそらく、意にも介さなかったであろう。レアンは特段優しい女性と言うわけではなかったし、どちらかといえば荒くれどもの中で生きてきた、たくましく、そして渡世に長けた女性であったと言えた。

そして、こういった生き倒れは捨て置くと云うのが、「彼女の所属する業界」における義理であった。今回もそれに従うはず、だったというのに。

ふとなにげなく目をやると、生き倒れの傍らに、ボロボロの白い布をぐるぐる巻きにした筒状の何かが落ちていた。なにげなくそれを手に取るレアン。

それはずっしりと重く、金属でできているのは明らかだった。なにかの武器だろうか。そう見当をつけて布を取り払ってみると、案の定頭れたのは細身の片刃剣である。

見たことのない武器だった。異国情緒の溢れるフォルム。鞘の留

め金には編みひもがかけられていて、すぐには刃を抜き出せないようになっている。

レアンはひとしきり謎の剣を見回すと、今度はその「持ち主」のほうに関心が向いた。つまるところ、傍に臥している生き倒れのことだ。

武器の正体はいまいち把握することは出来なかったが、なんとなくそれが価値のあるものであることは理解できた。立派な装飾が施されていることも要素の一つではあるにしろ、決定的なのは持った時の重さだ。単純な重さではない、時代の重さを感じたのだ。

それほどの名品を持つ者の顔を拝みたいと云う欲求が、レアンを突き動かす。

ゆっくりと衣服らしき布をつまみあげ、うつぶせの体をひっくり返す。

「あら……」

レアンは思わず声を洩らし、眉をひそめた。物騒な武器を携え、冷たい石くれの地面に抱かれていたのは年端もさほどいかないうような少女だったからである。

びっくりするほどに白い肌。閉じられてはいるものの、顔の結構な部分を占めていると思われる大きな両目。まつ毛は長く、人間と言っよりも繊細な作りの人形のようにも見えた。

しかも、その少女はさながら母の腕に身を任せているかのように、無防備な寝顔のような表情で？ 気を失っている？。表情だけならば

健やかに見えなくてもないが、顔色は悪いし呼吸も浅い。死んだように眠る、というのはこういうことなのかもしれない。

レアンはその顔を見ているうちに、なんとなく罪悪感のようなものを感じてしまった。捨てられている子猫の鳴き声を聞いてしまったようなものだ。

守ってもらわなければ、手を差し伸べてもらわなければ生きていけない者たちの声や表情というのは、確固たる意志をも揺らがせる威力が、引力がある。

「……」

——まあ、一晩面倒を見てやるくらいはいいだろう。

自分でも気付かないうちに、レアンは小柄な少女を背負いあげていた。

——顔色が良くなるまで食わせて、汚れた体を洗ってやって、少し眠らせる。そうすればあとは自分で何とかするだろう。なにしろ、この町？にやってきたのだから。

自分はお人よしではないのだ。そう自ら言い聞かせるように口の中で呟きながら、レアンは気絶して重くなった少女を揺り上げ揺り上げ住処に戻って行った。

+

ナギ・カガリが目を覚ますと、ほのかに甘さを含んだ煙が漂っていた。どこかの室内のようである。お世辞にも？きちんとした住まい？とは言い難いたたずまい（壁にはひびが入り、陽光が漏れ出し

ている）であつたが、特に散らかつているというわけでもない。

ある程度整理がついていて、不便ながらも最大限に機能的利用をしている、といったところだろうか。

物の配置が微妙なのは、おそらく雨が漏るからだろう。事実、ナギの寝かされているベッドは部屋の中心にどん、と鎮座しており、驚くほど（もともと狭い）スペースを占有している。部屋自体が散らかつていなくても、こんな状態では惨めに見えてしまうのもまた仕方がない。

いまいちはずきりとしめない意識の中、ナギは先ほどから自分を巻く甘い煙の正体を探した。白く、少し色がかかったような煙。閉め切られている窓。滞留する空気。ナギは身を翻した。

「あら」

その動きに反応した何者かが、少し驚いたような声を洩らした。声の主はたばこのようなものを啜えており、眠そうな目でナギを見ている。女性だった。

「えっと、あの」

煙の発生源はそのたばこのようなものだと思った。しかし、違ふ。おいを伴った煙を放っていたのは、女性の傍らに置かれた真鍮の受け皿の上の香木だった。啜えているのは嚙むための嗜好品かなにかのようだ。

「まあ、なにがなんだかわからないだろうけど」

女性は棒状の嗜好品を噛んだまま、器用に口を動かして話す。

「とりあえず、あたしがあんたを拾ってあげたの。それはわかる？」

「はい」

ナギはすぐに返事をした。目の前は粗野なイメージで、長く生きた野良猫のような目をしている。世の中に？スれている？ひとなのだとわかった。だからもごもごせず、少々怖じ気づきながらも明瞭に伝えておいた方がいいと思った。

「そう」

女性は興味を失ったようにそっぽを向いた。くすんだ茶色の髪の毛が波打つ。

「それじゃ、言うことわかるわよね」

「ありがとうございます。……おかげで助かりました」

ナギはそっぽを向いたままの女性の背中に礼を投げかける。名も

知らぬ女性は「ん」、とだけ答えると、口にくわえていたものを吐き出した。

勢いよく床を跳ね上がった嗜好品は、屑かご代わりの木箱の中へと吸い込まれるかのようにして消えていった。その様子を目で追っていた女性は緩慢な動きでナギを振り返り、

「立てるならこっち来なさい。いいかげんなんか食べた方がいいでしょ。アンタ」

ぶつきらばうにそう促した。してみると、不思議に今まで考えもしなかった空腹感が胃袋の底から突き上げてきて、ナギは思い切りうるたえる。隠し損ねた腹の虫をも聞かれ赤面。

「ふっ」

そこで女性がやっと相好を崩す。鼻から息を溢れさせて笑った。ナギはいよいよ恥ずかしさが増してうつむいてしまった。

「ほ」

呼びかけられておずおずと面を上げてみれば、堅焼きパンの切れっ端が差しだされていた。塗りつけられたバターの香りが鼻腔を揺さぶる。

「別に腹を鳴らすのは恥ずかしいことじゃないわよ。生きてるって明かしなんだから。ほら、いいからこっち来て食べなさいよ。餓死しても知らないからね」

自らもパンを口に運びながら、女性は言う。魅力的な香りがナギの衰弱しきった体を衝動に走らせようとする。少女はごくりと溜まった唾を飲み込み、

「いつ、いただきます……」

小さく蚊の鳴くような声で答え、そっと細い腕を伸ばすのだった。

## 第一話    s c a r   o f   m i n d   -   2

「、」

クラウフルヒ  
空の王都。

エルペイラ大陸における最大の？島？に築かれた巨大な城塞都市街は、世界一とまで謳われた規模の港を有する貿易の要としても名を知られている。

その端を発するは二百余年前の地殻変動であり、元はといえば低地に住めなくなった人々が逃げのびて暮らしていた小さな高地性集落でしかなかった。しかし、長い年月を経て多くの人間が集い、地殻変動以前の王族唯一の生き残りが立つたために国家が成立。とある学士の発明である空を駆る船《空挺》の活躍もあって、比較的新興であるこの国家は急激に発展を遂げたのである。

今や空挺は民間も所有できるものとなり、数多くの商団も結成され、国は潤った。人々は先人たちの苦しみを忘れ、日々満たされた生活を送っていたが—— たったひとつだけ世界の《負の遺産》が残ってしまったのだ。

それが——

「《クアトル》討伐……。数は数十匹。報酬ランクEマイナス。これじゃおまんまの食いあげよ」

レアン・シュレイフは酒場のマスターを睨みつけた。

彼女の手握られているのは、世界の空をわがもの顔に支配する怪物——俗に翼竜と呼ばれる反人間生命体討伐の依頼書である。

レアンはフリーの傭兵を営んでおり、こうして情報が集う酒場ギルドから時折依頼を頂戴して生活していた。もっとも、数年前からして翼竜の勢いは急激に衰えている。危険な仕事はほとんどなくなつたが、代わりに手五手も報酬もスズメの涙という依頼が増えた。それが空を駆る戦士、《大空騎士》としてのレアンの誇りを燦らせていたのである。

それ以前に収入が減ってきて、彼女が先ほどマスターに零したように口が干上がりそうなのだが。

「そんなこといわれてもな、お嬢さん。これでもましな方だぜ。それともなにか？ こっちの依頼を受けてみるか」

マスターは弱り切った溜息を吐き、投げやりな別の依頼書を渡して寄越した。受け取ったレアンは絶句する。

「犬の散歩。三日間。報酬ランクGマイナス……」

もはやお使いレベルの話であった。

「最近は本当にそういうくだらないものばかりが寄せられるんだよ。紹介する方も困ってるんだ。察してくれ」

マスターはそう言って、綺麗に剃毛した自らの頭を撫で回した。酒場ギルドの収入のひとつとして、レアンのようなフリーの大空騎士への仕事の斡旋による仲介料というものがある。酒だけ売っていても十二分に設けられそうだとは思うが、レアンはふと最近の不作による物価高騰を思い出した。結局のところ、「おまんまの食いあげ」は誰しも同じことなのである。

「……わかったわよ。これでいいわ。さっさと依頼受注のサイン。書くからペン寄越して」

「あいよ。悪いね」

「今回だけ言いっこなし、ってことにしてあげるわ」

結局危険度の低い翼竜クワトルを数十討伐するという内容の依頼を請け負ったレアンは、手早くサインを済ますといまいち釈然としていないような態度で店を後にした。

外に出れば、店内が薄暗かったがために空の青が眩しい。背中で昼間から酔っているロクデナシたちの声を聞きながら、レアンは視線をさ迷わせた。

——さて、待ち人はいずこか。

「あッ」

人込みの中に相手を探すレ안의耳に、聞きなれた声が響く。

昼間の巨大な奔流のような人込みをかき分けかき分け現れた人影は、その小柄な体躯に似合わない刃物を腰にぶら下げている。ナギ・カガリだった。

「姉さま。要件はお済みなのですか？」

「今終わったわ。予想通りミソっカスみたいなものしかなかったけどね」

言って、レアンはたった今受け取ったばかりの受注をはためかせて見せた。ナギは苦笑を浮かべて応える。

「仕方がないですね。今日も頑張りましょう」

誰しも生きること必死なのだ。

「そうね」

ナギの苦笑に、レアンも苦笑で返す他は無かった。

路上での衝撃的な出会いから二ヶ月間。レアンとナギはなんとはなしに行動を共にするようになっていた。

とにかく日々を生きることだけを目的とするレアン。武者修行のために東の小さな島からやってきたものの、その世間に対する無知加減と生活力のなさで行き倒れてしまったナギ。

似ても似つかないような二人であつたが、ナギが自分に懐いていることを、レアンが邪見に想うことはなかった。レアンは優しくない——らしいが。とにかく、自分を慕う少女を無理やりに引っぱがすことはどうにも出来なかった。

当初の誤算を悔いることも多々あつたが、今はそういうことも無くなっている。

なぜかといえば、ナギがそう『やくたたず』では無かつたからというのが大きいのかもしれない。彼女は確かに世間に対してやや甘いようなものを持っていて——事実まだ十四歳なのだから、仕方ないといえば仕方ないのだが——ひとりではどうにも生きていけそうにない。

これだけならタダのごくつぶしとしてレアンも早々に放り出していたことだろう。しかしながら、ナギにはレアンの仕事を手伝えるだけの力があつた。

すなわち、翼竜との戦闘。これにおいてナギはそこそこの力を発揮したのだ。

小さな体を生かした素早い攻撃は、並の翼竜くらいならば凌駕出来るほどのものである。さながら稲妻か、春閃く一迅の風のごとく。

なにしろ剣の振りの速さに関してはレアンをも上回るものがあつた。

レアンはその力を評価し、「自分の食いぶち程度には働くこと」を条件にナギを傍に置いた。ナギはいまのところ、なんの不平も洩らさず付いて来ているし、しっかり働いてもいた。

——はや二カ月。漠然とした関係が続いている。

レアンは隣にひとを置いたことなど、これまで三年間ほど無かつた。それは辛い経験につらなるものなのだから仕方がない。しかし、今更なれ再びひとを傍におこうと思つたのか。

時折レアンは、楽しそうに傍らを歩くナギを見て考えることがある。を条件にナギを傍に置いた。漠然とした関係が続いている。

レアンは隣にひとを置いたことなど、これまで三年間ほど無かつた。それは辛い経験につらなるものなのだから仕方がない。しかし、今更なれ再びひとを傍におこうと思つたのか。

時折レアンは、楽しそうに傍らを歩くナギを見て考えることがある。このままこの娘を傍において、以前のように？取り返しのつかないこと？を呼び込んでしまったらどうしよう。そう思つて少し怖くなるのだ。

——まあ、でも。

そのたび、ナギの横顔を見ていてもよくなる。ナギはいまのところ、なんの不平も洩らさず付いて来ているし、しっかり働いてもいた。

——はや二カ月。漠然とした関係が続いている。

レアンは隣にひとを置いたことなど、これまで三年間ほど無かった。それは辛い経験につらなるものなのだから仕方がない。しかし、今更なぜ再びひとを傍におこうと思ったのか。

時折レアンは、楽しそうに傍らを歩くナギを見て考えることがある。このままこの娘を傍において、以前のように？取り返しのつかないこと？を呼び込んでしまったらどうしよう。そう思っただけで少し怖くなるのだ。

——まあ、でも。

そのたび、ナギの横顔を見ていてもよくなる。悪く言えば、きつとこの今のような状態がずっと続くものだ。と錯覚させられるのだ。いつのまにか、レアンは拠り所を見出していたのかもしれない。依存すると言っことは、必ずしも物理的である必要はない。精神的にもまた然り。

ナギの存在は、レアンの？けじめ？をまた一層遠いものにしてしまったのであった。

十

+

街並みに行く。

クラウブルヒは人の出入りが激しいから、混血も進んでいる。したがって他地域よりも人種のはばは広く、大きな通りにいる時でさえも？似たような顔？を見つけるのが難しい。肌色が違ったり、目鼻立ちが違ったりと様々である。

そんなわけだから、タイプのまったく違うレアンとナギが連れ立って歩いていても誰も特別に関心を揺さぶられることはないのだ。とはいえ、彼女たちは一般的に言って申し分のない魅力を持っていたので、？そう言う意味では？目立っていたのかもしれないが。

——閑話休題。

人々の波は街中から港にかけての、いわゆるメイン・ストリートにかけて激しさを増す。時折牛が引く車だとかも通るので、あまりぼんやりと歩いていると『交通事故』を起こすことさえあるほどだ。レアンは夜の、少し人通りの掃けたこの通りが好きだったが、どうにも昼は危なくて、前後左右に、それから今はナギにと注意を払わなければならないので辟易してしまう。

とにもかくにも彼女の仕事は、街の外側に行かないと始まらない。そこまで行くのに疲れてしまっただけは元も子もないように思う。けれどもこればかりは仕方がないのであった。

まるで子供にやるように、レアンはナギの手を握って歩いた。「恥ずかしいです」と小声で抗議があるものの、「この間、はぐれて大恥をかいたのはこの誰よ」と反撃すると、元から勢いのない反抗はすっかり萎れて力を失ってしまった。後には恨みごとのような周囲の雑多とした音にかき消されて霧散した眩きが残った。

……ちなみに、件の騒動で一番恥をかいたのはレアンである。何百という公然の中、大声で「姉さま」と呼ばれ、それを迎えに走った時の恥ずかしさと言ったらなかった。二度とあの羞恥を味わうことなきようと、レアンは握る手に力を込める。長い間重なっていた手と手は、どちらのものともされない汗でぬめっていた。

「姉さま、痛いです」

——おっと、いけない。

レアンは再三の抗議を耳にし、ぱっと手を放しそうになるのを辛うじて避ける。痛いほど握りしめていた手を引いて、人の波に紛れ込んだ。

わきの方を緩慢な動きで牛車が通り過ぎるのを待ってから、ようやくレアンは握力を緩める。ただ振り回されていたかたちのナギは、目を白黒とさせてレアンの顔を見上げていた。

「ほら。これだからあんたは一人にしとけないのよ」

レアンは口をもごもごともたつかせながらそう言つと、またもや強引にナギの手を引っ張って歩き出した。

「姉さま、痛いです」

もう一度言われてから歩調を緩め、立ち止まる。レアンは繋がれたままの手を示してこう言つた。

「ちゃんとはぐれないで付いてくるなら、放してあげなくもない」

それは、レアンが提案したことに対するレアンからのギブアップ宣言であつた。ナギは小さく笑つて「はい、頑張ります」と答えた。少し手を話すのが惜しかつたようではあつたが。

レアンとナギは手を離し、港に向かって並んで歩くことになった。

—— 妙にスースーとする。

レアンが妙な解放感と寂寥感を胸に右手を握つたり開いたりしていると、またいつの間にか傍らの気配はかき消えている。それはもう、風の如く。

「はっ」

気付いた時には、もはやナギは行方をくらましていた。後ろの方で自分と呼ぶ声を聞き取ったレアンは、盛大に嘆息をした。

この日、ナギ・カガリの重度の方向音痴および迷子癖が発覚したのである。のち、レアンはこの病気とも言える癖に散々悩まされることになるのだった。

+

港に着いたのは正午過ぎ。

特に時間がかかったわけではなかったが、レアンには時計の針が十二周したくらいの長い時間をメイン・ストリートで過ごしたかのような感覚が残った。

目を閉じればナギの呼び声と周りの忍び笑いが聞こえてくるようである。

協議の結果、これからはナギがレアンの服の裾を掴んで移動するという内容で両者の同意が得られた。最初からそうすればよかったのではないか、と思ったことに関しては、二人とも互いに気を利かせて黙っていたという。

「さて、仕事場はどこだったかしらね」

「ええと、向こうの見張り塔のほうですね。てっぺん付近で大量の《クアトル》を目撃、と書いてありましたよ。姉さまの受注書に」

レアンはすっかり気を使い果たしているのにもかかわらず、ナギはけろりとしたものだった。台風の目の中心は凪いでいる。そんな

言葉を思い起こさせるようだ。

レアンは気のない溜息を吐くと、古ぼけた見張り塔を見遣る。なるほど小さな生物がてっぺん辺りにまわりついている。

塔はいかにも昔の名残、といったような風貌で役に立ちそうにもないが、翼竜の動向の観測には一役買っている重要施設、らしい。そんな場所を最低ランクの翼竜に占拠されているところを見ると、人々の翼竜への危険意識が弱まっていることが窺える。

翼竜を生涯の敵とするレアンたち《大空騎士》からしてみれば、今こそ高らかに警鐘を打ち鳴らすべき時なのかもしれない。

「しっかしまあ、なんであんな何もない塔なんかを占拠してるのかしら。連中、だいたい食い物のことにしか興味がないのに」

翼竜の多くは人を襲う。それは捕食するために他ならないが、中には人間ではなく小動物を捕ったり、残飯をあさりに来る種類までもいる。《クアトル》は翼竜の中でも小型で、滅多に人を襲うことはいない個体だ。だいたいは人間の出した残飯に群がるので、しばしば？街中で？討伐依頼が出される。裏を返せば、彼らにとっての食べ物がない場所では歯牙にもかけられないということなのだが。

「私には姉さま以上の知識がないのでお答えできませんけど。とにかくあそこに居られると見張りの方がお仕事できませんし、早く片付けてしまった方がいいんじゃないでしょうか」

ナギの言つとおり、見張り塔を翼竜が占拠しているという事実には違いがない。いかに《クアトル》が人を襲う種類でなくとも、まさか一昼夜共に仕事をするわけにはいかないのだ。駆除する必要がある。レアンはけだるそうに両肩を下げた。

「そうね。あまり広い場所じゃないから、今回はアンタは下にいなさい。あたしだけで十分よ。あれくらい」

レアンはそう促すと、ナギは少し不安そうな顔をした。まるで打ち捨てられることを恐れる小動物のよう――ではあったが。レアンは楽観的になっていて、ナギの頭を二三回撫でるように、ポンポンと叩いてからゆっくり歩み始めた。

背中に負った彼女の武器が、昼の太陽のもとに鈍色に輝いている。それなりに高級な武器。俗命を機構剣というものだ。

剣の柄にトリガーが備え付けられており、それを引くことによつて様々な効果を生じさせる現代技術の集約された武器である。レアンの持つ《レッドライダー》は『銃撃』タイプの機構剣。トリガーを引けば、剣先からフレアが迸る高威力のギアを搭載しているものの、燃費が悪く、彼女自身はほとんどただの剣として扱っている始末である。

しかしこの場合、狭い塔の中で戦うのだから、最初からギアを発動させることは出来そうにない。好都合とはいえないが、普通の剣で戦うのだと思っておけば間違いはないわけだ。

「いつてくるから」

レアンは笑いながらナギに言った。

こういう時のレアンの目は何かしらの魔力を秘めていて、ナギは簡単に逆らうことが出来ない。なにか言いかけようと手を伸ばすが、どうにも声にならないのだった。結局、無理に後を追うことはしない。

レアンは軽快に見張り塔まで歩み寄ると、あらかじめ酒場で受け取っておいた鍵を使って錠前を外す。重苦しい音を立てて開いた扉の向こう側から、カビ臭い空気がどっと押し寄せてくる。一日数時間歩哨立つはずなのだが、ろくに掃除がされていないのだろうか。件の翼竜が住み着いたのは一週ほど前のことだというから、普段から清掃を心がけていればこうも醜えたにおいはすまい。

レアンは鼻をこするふりをする、石造りの建物の中に入っていた。窓が少ないため、昼間でもだいぶ暗い。おまけに空気もこもっている。少々獣臭いような気がするのは気のせいではないだろう。正面のらせん階段を上ってゆく。音の逃げ道も少ないので、靴音が良く響いた。こんなに音を立てたら翼竜に気付かれそうだとも思ったが、相手は人間を相手に逃げてゆくような種族だ。別に気にすることもあるまい、と思うことにした。

やがて、階段が終わりにさしかかってくる。出口に設けられた扉に付けられた小窓から太陽光が洩れている。日差しはそこまで強くはないはずだったが、それでも建物の中が暗いと輝かしく見えるものだ。レアンは瞳に光を取り込み、何とはなしに安堵のため息を吐いた。速く外の空気を吸い込みたい気分、体がそわそわしている。

レアンは淀んだ空気が嫌いだった。いや、好きな人間などそもそも居ないだろうが。

鉄の扉に手をかける。軽く押しても軋るばかりで開かないので、思いっきり体重をかけて押しあげた。重い機械を引きずるような耳障りな音を立て、扉が放たれた。光が目に染み、奪われた視力が回

復したころには、視界一杯に想像以上の光景が広がっていた。

「うげっ」

思い切りのけぞるレアン。はたして、見張り塔のてっぺんには《クアトル》が犇めいていた。数はおよそ二十。蛇に無理やり鳥の翼を縫い付けた様な、なんとも気色の悪い生物が大挙していたのである。依頼書よりも数が多い気がしなくもない。——いや、実際多いのだろっ。おそらく増えたのだ。

（まさかこいつら、こんな場所で産卵してたの？）

塔のてっぺんに巢食っていた《クアトル》の群れには、成体に混じってちらほら幼体の姿があった。翼竜のなかにはしばしば脱皮をして成長をする個体があるが、《クアトル》はなかでも極端に成長が早い部類として知られている。

卵から生まれて三日で一度目の脱皮を経験し、五日目には覚束ないながらも飛べるようになるというのだから驚きである。塔に翼竜たちが現れた時期からして、今飛んでいる幼体は飛べるようになったばかりと思ってよいだろう。成体以上に危険度は低い相手だが、それにしても並の生物と一緒にしては怪我をすることだってある。生まれながらに肉を噛みちぎる歯は備わっているのだから。

——たかが子供。されど子供。

レアンは気を引き締める。子供だつてやるときはやるのだ。

後ろ手にドアを閉め、一様にこちらを睨めつけている《クアトル》たちを刺激しないように、ゆっくりと壁に沿って移動し始めた。まずは数がない場所から攻めていこうとする試みである。

途中、床に転がっていた脱皮の痕跡——本物の蛇より固くてゴツゴツしている皮——を踏みつけ、そのグロテスクさに少し気持ちいが萎えた。こんな仕事、早く終わらせてしまおうと改めて思いなおすレアン。

円形の壁に背中を押しつけたままの力二歩きでやつと半周し終えたところ、ようやく三体ばかりが固まっている場所を見つけた。二体は成体。一体は幼体。家族のように見えなくもないが——

「悪く思わないでよね」

こんなところで産卵なんかしなきゃね、と呟き、レアンは静かに背中 of 得物を抜き放った。《レッドライダー》はそのギアの特性から、女性が使うにはいささか大ぶりであると言わざるを得ないフォルムである。しかしながら、レアンはそれをきちんと両手で扱えるだけの臂力と技術を培ってきたのだ。

傭兵に男も女もない。ハンディがあるのなら、それを補うだけの努力をすればよい。……そういった考えが、《大空騎士》としての今のレアンの基盤を築いたのだ。

《レッドライダー》は抜き放つと、手にずしりとした重さを与えてくる。その重さを両掌で握り返した時、緊張感や閉塞感はすべて覇気や錬気に変える。戦いの準備は静かに済んだ。

まず一步、踏み出す。相手は動かない。琥珀のような目でこちらを見定めている。上等！

「……………ハアッ」

そうやって少しずつ間合いを詰めた後、腹の底から気を吐いて剣を振り抜く。踏み込みが勝負だ。しっかりと大地を踏みしめ、腰を据え、そしてなにより速くなくてはならない。《レッドライダー》は虚空に刀身と同じ鈍色の軌跡を残し、横薙ぎに《クアトル》二体を吹き飛ばした。ドッ、と鈍器で殴りつけたような音がする。《レッドライダー》は切り裂くようには出来ていない。ギアの衝撃に耐えるように刃は厚く、その斬撃は大きさや長さによる予想を超えた凄まじい衝撃を生む。

それに思い切り巻き込まれた二体の憐れな翼竜は、床に叩きつけられてぐったりと臥してしまった。悲鳴や威嚇の声を上げる間もなく、の出来ごと。突然の出来事に啞然としてしまうのはなにも人間だけではない。残された幼体の《クアトル》も、しばし空を漂うだけになっていた。

それをいい機会だと判断したレアンは一気に《レッドライダー》を振り下ろす。それこそ成すすべもなく幼体は斬り臥せられてしまったが、床を勢いよく穿った刀身が火花と共にけたたましい音を立ててしまう。塔全体に振動が行きわたるが如く重い一撃だった。がために、事態は風向きを変えてしまった。

「やばっ」

小さく舌打ちし、力を込めて《レッドライダー》持ち上げるレアン。不意を打ったつもりがつい調子に乗り過ぎてしまったようである。さすがに打ちおろした大剣を支えるだけの腕力は彼女にも備わっていなかった。

すぐさま壁に背を付けて辺りを見回すと、散っていた《クアトル》《たちが集まり来てしまっていた。音に反応して駆けつけ、侵入者と仲間の死骸を発見する。なにが起こったか把握するのに、その時間はかかるまい。

《クアトル》たちは一斉に喉をチリチリと鳴らし始めた。威嚇行為だ。一体ならまだしも、数が集まると耳を覆いたくなるほどうるさいものがある。そしてその音は、レアンの焦燥を否が応にも煽るのだ。

「これは……      本格的にマズったかもしれないわ」

——まさかこんな低級翼竜に追いつめられるとは。

レアンはしょぼくれた溜息を洩らした。ナギを連れてこなくてよ

かったと思う。

（さすがにこんな情けない姿は見せられないなあ）

鼻で自分を笑い、壁から背を話して《レッドライダー》を構える。相手は人間を襲うことが？少ない？翼竜であるが、完全にレアンを敵と認めているようだった。こうなってしまうえば、正面から襲ってくる敵を迎え撃つしかない。柄に汗がにじむ。

——大丈夫だ。いける。深く息を吸い、心の奥底の熱い闘志に火を注ぐ。何度も斬捨ててきた相手だ、と油断することなかれ。数瞬前の自分を思い切り蹴飛ばし、気持ちを新たに。こういう時ばかりは、手前勝手な性格が生きてくるものだ。

いからせていた肩の力を抜き、なるべく自然な形で構えをとるように心掛ける。ただでさえ狭い場所で不利な両手剣だ。先ほどのように無駄の大きい動きは怪我が、最悪命にかかわる事態につながりかねない。

「さあ、来い」

小さく挑発の言葉を口にし、切っ先を自らを囲む翼竜たちに向ける。いよいよ威嚇音は大きくなり、いつ襲いかかってきてもおかしくはない雰囲気。

レアンの持つ剣の切っ先がわずかに上下した時、ついに《クアトル》たちは動き始めた。一斉に翼を広げ、割合小さな体を大きく見

せるようにして飛びかかってきた。どこをどう見ても掻い潜るための隙間はない。残された突破口は敵が支配する正面一点となる。

「……ふんッ」

先陣の数体を最小限の動きで打ち払い、体勢を低くして残りを躲す。何体かは壁に激突して床に落ちた。それを振り返る余裕もなく、今度は身を翻して空を背に翼竜たちをにらみ返す。

数はだいぶ減った。が、敵はまだ前方百八十度に展開している。足場はしっかりしているものの、そう広くはない。大立ち回りにも限界がある。

（あとが無くなってきたか……）

一応落下防止の塀はあるが、万が一にでも落ちれば命はないだろう。下を見ないようにしながら、レアンは静かに息を呑んだ。もっと広い場所での戦いならば、とうに決着を見ていたのだろうが。

広さなど関係のない翼竜たちは、レアンの事情などどこ吹く風。遠慮もなしに次々とかかってくるのだから堪らない。

両手剣は広い範囲を攻撃できる武器だが、裏を返せばピンポイントの攻撃が出来ない、勝手の悪い武器とも言える。レアンはその弱点を補う戦法を数多く知っていたが、それもまた広い場所での話。塔の狭さは予想以上にレアンの力を削いでしまっていた。それでもなお戦えていること自体、強さの証明であるにしろ、だ。

《クアトル》たちは風を翼に孕ませ滑空するようにして、次々レアンに襲いかかってくる。レアンはそれらを、順序、範囲、力加減に細心の注意を払いながら払い落していく。絶大な集中力と動体視力が必要な作業。気の緩みは一切許されず、目の奥が火傷したかのよう

その奮闘の甲斐あって、《クアトル》は順調にその数を減らしていった。一体、また一体、と弾き飛ばされ、翼をへし折られ、次々に床に落ち空に散る。

下の人間は、死体が降つてきてさぞ驚いていることだろう。レアンにはそのようなことを考えている余裕はなかったのだが。

だんだんと腕がしびれてくる。腕に本来かけなくていい負荷をかけているからだろう。握力が落ちてきたようだった。それでもレオンは奥歯を強く噛みしめ、おおよそ普段の落ちつき払った態度から予想がつかないような、低いうなり声を発して《レッドライダー》を振るう。

残り三体。倒せないはずはない。獅子はウサギやネズミを捕るときだつて必死なのだ。ここで氣を抜くわけにはいかない。そう自分に言い聞かせて柄を改めて握り直し、

「あたしのオ……、糧になれえええええ！」

咆哮。  
一撃を放つ。

それはそれは重い一撃だった。春一番を思わせるような突風と、

？灼熱の波動？。目の前の敵を残らず巻き込んだソレは—— まさしく《レッドライダー》のギア発動による《銃撃》。剣中央に顔を覗かせる噴射口から刹那、オレンジ色のフレアが炸裂して古びたグレーの石壁を、青空を舐めた。けたたましい音は虚空に反響し、人々の注目を集める。従順に下で待っていたナギの顔は蒼白。

「えっ」

その力の炸裂に何より誰より驚いたのはレアンであった。しかしそれも一瞬のことであり、すぐに自分が何をしでかしたか理解する。

（間違えてトリガー、引いちゃったか）

持ち替えた時、痺れて鈍くなった指がトリガーに触れてしまったのに気付かなかったのか。あるいは誤作動だったのかもしれないが—— ともかく、それは明確な事故だ。

レアンは自分の身体のバランスが崩れる様を、どこか他人事のようを感じていた。《レッドライダー》は手から離れ、彼女の足も石造りの塔の床から離れる。背中が虚空。つまりは…… 自由落下。結わえていたひもが解け、レアンの長い頭髪が風に弄ばれて乱れた。一瞬の出来事に、むしろ心が追いつかない様子で、レアンは空を切り裂いて堕ちてゆく。

悲鳴。怒号。誰かが何かをしきりに叫んでいる声。そのすべてがレアンの耳に届く前に散らされ、無音に変わった。

(……あたし今、落ちてる)

不思議と体を包むのは重力ではなく、浮遊感であった。双眸は呆けたように遠ざかってゆく空を見つめている。なぜか死は脳裏を過ることがなかった。死ぬ気がしなかった——と言っても良い。

その時すでに、予兆があつたのかもしれない。少なくともこの時、世界はレアン・シュレイフの死を是としなかった。

——ナギの悲鳴を聞きとつた気がした。その次に、地面が近づいてきたことによ、浮遊感から解放されて一氣に感じる重力。その場に居合わせた人々のどよめき。兆しはそればかりだった。

「——ッ？」

突然ひととき大きな重力の塊を腹に受けたような感覚に、レアンは背をのけ反らせた。しかしそばから伸びてきた「腕」に脚の関節と肩を抱かれ、いわゆる「お姫様だっこ」のような体勢で固定され、動けなくなってしまう。

あまりの予想外さに目を白黒させていると、？落ちてきたレアンを受け止めた何者か？が膝を折って地面に着地する衝撃が伝わってきた。落ちてくる人間を空中で受け止め、着地する。実に危険で人間離れた芸当だ。浮世を離れている。そしてそれをやってのけた人間は——

「痛たた、やっぱり無茶が過ぎたかな。腰と肘が参っちゃうよ」

そう言って笑う、実に飄々としたイメージの青年であった。ブロンドのアシンメトリー。白いビロードを羽織った彼の姿は、レアンの記憶の底に眠る人物の姿と酷似するところがいくつかあった。

「ア——」

「ん？」

レアンの無意識下の呼びかけは、しかし観衆たちの拍手喝采に裂かれて霧散してしまった。

口笛。野次。手拍子。港はしばらくの間ちよつとしたお祭り騒ぎとなり、レアン・シュレイフは予期せず人生で初めて『ヒロイン』の立場を味わうこととなった。

……それはそれは居心地の悪い『役柄』だったと、彼女は後に語る。

「、」

## 第一話 S c a r o f m i n d - 6 (前書き)

大きな地震がありました。

幸いにもわたくしは無傷でしたが、被災者の方々のことを思つとも  
のすごく心苦しい。

なにもできない、と落ち込んでいるよりは少しでも誰かの気がまぎ  
れるように、更新をしたいと思います。

どうかみなさん御無事で。

「いやあ、良かったね。助かって」

レアンを間一髪のところでは助け出した青年は、穏やかに笑いつつ、まるで他人ごとのように言う。語調も世間話をするような調子で、どうにも身が入りそうになかった。

「あたしもあんなことになるなんて思っても見なかったわ。おかげで塔が傷んじやって、修理費で報酬がそっくりパアよ」

「命在つての物種、です」

ナギの小さな戒めの呟きに言い返しも同意もせず、レアンはただ長々と溜息をひとつ吐いた。

レアンとナギは衝撃の出会いを果たした青年に連れられ、港近くのオープンカフェへとやってきていた。日傘のもと、石畳の街道を行き交う人々の様子がよく見てとれる。人混みを眺めながらの食事に風流もなにも在ったものではないが、それでも風を感じられる分、店の中よりはさわやかではある。テラス席をとれたのは僥倖だった。

ナギはこういった洒落た店に来るのが初めてらしく、終始落ちつかない様子であたりを見回している。大してレアンは落ち着いてい

て、助けられた相手の誘いに対してでもふてぶてしい態度でリラックスを決め込んでいた。

「……で、なんであたしらを食事と呼んだわけ？」

「いや、あれだけ目立ったわけだから、『お姫様』は『騎士』と一緒に去ってゆくのがセオリーかと思ってね」

青年の冗談とも本気とも取れないキザったらしい台詞に、レアンは呆れたようにかぶりを振った。普通の男がこれを言ったら笑いぐさにしかないはずなのに、この青年が言うとなると妙に似合ってくるからいただけない。それがなんとも言えず腹立たしかった。

「なにそれ。新手のナンパ？」

「ちよつとした冗談さ。僕って今みたいなことを？ 言いそうな顔？ だろ？」

さつさと本題に入れという、軽い嫌味のつもりだったのだが。変則的な切り返しに、突然大人しくしていたナギが吹き出した。レアンはナギの反応に半ば圧倒されつつ、少々遅れながらも苦笑を浮かべる。

「そうね。見えなくもない」

「そうだろ？ 渾身の冗談だったのにな。君も彼女みたいに笑ってくれるかと思っただけだね」

「残念ながら、あたしのツボは深いのよ。出直してらっしゃい」

「こりゃ手厳しい」

初対面の二人の会話は、実に軽妙であった。

——自称キザ顔の青年は、セラフィード・ラクスイウス。通称「セイン」と名乗った。ブロンドのきめ細やかな頭髮に、長身。嫌味の少ない笑み。ただ立っているだけでも目を引きそうな美青年であるが、それと同時に相当胡乱であった。

なにより言動が雲を掴まされているかのようで正体無く、加えてレアンを助けた時に見せた？あの？運動能力である。只者ではないと疑われても仕方なかるう。そして実際、彼は只の人とは言い難い人間であった。

「君はあの塔で仕事をしていたんだよね？」

「そうよ。まあ、結局食いつばぐれちゃったけど」

スズメの涙ほどであった報酬は、レアンのミスから引き起こされた塔の損壊にすべて徴収されることとなった。おかげでレアンの懐

には銅貨一枚も入ってこなかったのであるが、実際塔の修理費は報酬額を超えていた。つまり、お情けを頂戴したことになる。それがレ안의プライドの崩壊をなお助長していた。非常に惨めである。

「おまけに武器は落ちて壊れるわ……。修理費もないのにどうしろってのよ」

レ안의憂鬱に追い打ちをかけたのが愛剣の破損である。レッドライダーあの恐ろしい大剣がレアンと一緒に落ちてきて誰一人怪我をしなかったことは不幸中の幸いだったが、《レッドライダー》自身はその重さから地表に叩きつけられた際に大破。砲撃にも耐え得る厚手の刃も成す術もなくへし折れ、この事件でおそらく一番の被害を被ってしまったのではないかと思われるくらいに惨めに壊れてしまったのだ。た。

投げやりに言い放つレアンに対し、セインはにやりと笑ってこんなことを切りだした。

「そう。それなんだけどね。その剣の修理費と、貰えなかった報酬が欲しいとは思わないかい？」

「……どういうこと？」

レ안의眼差しが細く尖った。美味い話には棘と毒がある。それをよく知っているレ안의、脅しを含んだ強烈な視線。それを真っ向から受けたセインは、しかし少しもたじろいだ様子はなく話を継

いだ。

「別にやましい話じゃないよ。僕の《獵団》に力を貸してほしい。お金は僕から君たちへ報酬という正当なカタチで受け渡されるわけさ。悪い話じゃないだろう？」

「アンタが《獵団》を？」

それまで冷静に表情を変えなかったレアンが、そこで驚きをあらわにした。

《獵団》といえば、元は王国直属の翼竜狩りのスペシャリストである《大空騎士》の集団をさす言葉であった。ところが三年と数ヶ月前に起こった？ある事件？をきっかけに、王率の《獵団》はすべて解散。今ではそれから興った、民間の翼竜狩りを生業とするハンターを《大空騎士》と呼び、その集団——すなわちギルドを《獵団》と呼び習わすようになっていたのだ。

——しかし。獵団は誰でも簡単に運営・組織できるものではない。民間獵団の多くの構成員はもとも王率の獵団員であり、経営者はその中でもベテランで知識の豊富な者が務めることが多い。レアン自身も？王率獵団の一員であった？ことがあるので、それは良く知っている。それだというのに、だ。

レアンはじつと目の前の青年の顔を見つめた。意味ありげな微笑を湛えるその表情は、妖しさ以上の、魂胆という言葉では推し量れないような螺旋状の心算で隠されてるようである。信用という言葉に値しない男だ。そう思った。しかし同時に、ブロンドの頭髮によく映えるスカイブルーの瞳のどこにも嘘は見いだせないのある。

セインは嘘を吐いてはいない。ただし、何らかの思惑があってレ

アンを誘っている。それはなぜだか確かに思えた。

「僕が経営者には到底見えないだろうけど、事実だから他に伝えようがないんだ。なんなら手持ちの？脚？をお見せしようか？それが証拠になるかどうかは別だけれど」

レアンの内心の値踏みを知ってか知らずか、セインはそんなことを言い出すのだった。獵団にとっての？脚？。すなわち――

「《空挺》を？」

「ああ。獵団が空挺を持ってないんじゃないだろう？ まずは見てから決めてもらいたいね。別に強制するつもりはないんだから」

空挺。空を駆ける船。レアンにとって、空挺はすべて「忌むべき場所」である。空挺嫌いの《大空騎士》が生きていける道理はないが、それでも彼女が翼竜退治を生業とすることに固執するのは、罪滅ぼしか、あるいは迷いの所為なのか。

ともあれ。再び空に舞い上がることを想像するだけで、レアンの心はぎゅっと絞りとまれるような感覚を訴えてくるのだった。

（……受けても地獄。受けずとも地獄、ね）

選ぶは大空の恐怖か、はたまた飢餓地獄か。

レ안의視線は、横でサンドウィッチを必死に咀嚼している小柄な少女にとまる。最近まともなものを食べさせてやった記憶が無い。軽食の類であるバンズに夢中になって食べている姿を見るとどうにも切なくなってしまうのだった。

（まったく。あたしはこの子の姉や母親じゃないのよ……？）

自分にそう言い聞かせても、やはり駄目なのだ。どうも自分はナギの保護者にでもなった気らしい——と内心溜息を吐き——いや、実際は思い切り現実で嘆息していたのであるが。諦めて腹を括った。

「……わかったわ。見せてもらう。それから色々と決めることにするわ」

「そうこなくちゃね」

セインのしたり顔にもう一度嘆息。「見てから決める」とは言ったものの、結局この場で答えを出したようなものだ。

——してやられた。



第一話    s c a r   o f   m i n d   -   7

+

「翼竜の卵お？」

セインの所有する空挺へと向かう道すがら、レアンは「力を貸してほしいこと」について改めて訪ねた。それに対するセインの回答が、彼女の度肝を抜いたため、先の絶叫である。

「そうなんだ。馬鹿な話だろう？　でも、受けちゃったものは仕方が無くてね……」

セインは初めて困りきったような苦笑を見せ、頭を掻いた。彼もその仕事には気乗りがしないようである。むしろ気乗りの問題ではなく、「翼竜の卵」自体にいいイメージを持っていないのかもしれない。

「しかしなんでまた、あんなものを欲しがる人間がいるのよ」

レアンはわかりやすく終始しかめっ面である。俗に「翼竜の卵」と呼ぶ中型竜の卵には用途がほとんどなく、仮に用いるとしても油の抽出。食そうとしようものなら――　ぶるり。過去の過ちと悪夢の風味を反芻させ、レアンは気分が悪くなった。

「それが、ね。うん。？あの味？が好きな人もいるらしいよ、この世界には」

セインも過ちを犯したクチなのだろう。こめかみに指を当て、苦々しげな表情で思い出を追いだしているかのようだ。

「うそでしょ？ あの究極のゲテモノを……」

レアンの色が悪化する。ひとり悪夢を経験していないらしいナギは、オロオロと苦しげな二人を交互に見つめるばかりである。知らぬが仏とはよく言ったものだ。

「モノ好きな人も世の中にはいるものだね、まったく。信じ難いけど、これってAプラス級の依頼なんだ」

「Aプラス……」

絶句。とんだ金持ちの悪食もいたものである。感覚は人それぞれと言いたいところであるが——少なくとも、レアンにとっては、あの喉に張り付くような粘着性と苦みと臭さはトラウマ以外の何物でもないのだった。どうしても食べるものが無くて、ついつい手を出してしまったが、生きるためだったとはいえ、今でも強烈な後悔が襲い来るのに耐えなければならなかった。それほどまでにマズいものなのだ。翼竜の卵は。

「それで……。『ワイバーン』の巣に行こうと考えてたんだけどね。折が悪くて腕の立つ二人が別行動中で人員に不安があつたんだ。二人が帰ってくるまで待つ、って手もあったんだけど、それまで依頼人が我慢していられるかと考えるとどうも……」

悩ましげに息を吐くセイン。どうやら獵団にとっても世知辛い時世のようだ。依頼人の機嫌を損ねるわけにもいかず、かといって人員不足の状態で『ワイバーン』——危険度中程度の典型的な翼竜

である—— の巣に乗り込むなど自殺行為もいいところだ。オーナ  
ーとして悩ましい問題に違いない。奇しくもその辺りはレ안의  
状況に似ていた。

「なるほど。それであたしたちを、ね」

「そついうわけなんだ」

セインは肩をすくめてそう語ったが、レアンはやはり釈然としな  
いものがあつた。

塔から落ちてきた女と年端もいかない少女。果たしてそんな連中  
を、自分なら雇い入れるだろうか。それも会って間もない、お互い  
ほとんど知り合つてもいないうちに。

（なに考えてるんだか……）

怪しい。まったくもって怪しい。しかし、本気で疑う気にもなれ  
ないのだった。それはなにより、セインがレアンに？とある人物？  
を強く思い起こさせるからだろう。髪形も顔も背格好も似てはいな  
かったが、涼やかなスカイブルーの瞳—— それに見つめられると、  
自ら封じた昔の記憶が戻ってきててもどかしい気分になるものだった。  
過ぎたことを忘れられない弱さを感じ、レアンは人知れず嘆息する。

「ん、どうしたんだい、変な顔して」

「別に。どうもしない」

まさかそれを、本人の目の前で言うわけにもいくまい。レアンは  
内心慌てて顔を逸らし、平静を装った。セインはしばらくレアンの  
横顔を見ていたが、黙って進行方向に視線を戻し、後は黙々と歩い

てゆく。ナギはそんな二人の後ろを、はぐれないようについて歩くのだった。

ぼちぼちと三人連れ立って港の端の方まで歩いてゆくと、民間ドックの中のひとつに異形の空挺の姿が見えてきた。普通の空挺に備え付けてあるはずの、軽量ガスが詰まった？浮き袋？がなく、プロペラの数が少ない。鉄製の流線形のボディは無駄がなく、現実稼働している乗り物というよりは精巧に造られた模型のようだ。鉄の塊のようなそれが飛ぶとは信じ難く、レアンには当初、それが空挺ドッグに納まっていることが不自然に思えた。

「これが僕の獵団の船、《フリーユゲル》さ。見慣れない形だろう？」

レアンの表情を読んでか、セインが鉄の塊を指して言った。対してレアンは正直に頷き、

「正直、これが飛ぶようには見えないわね」

「ははは、僕も？初めて見た時は？そう思ったよ。でも、《フリーユゲル》がここにあること自体が、飛ぶ証明だと思うんだけど」

確かにセインの言うとおり、飛行能力がなければそもそも空挺専用ドッグに停泊しているわけがない。ともすれば、？これ？が空挺であることを認めざるを得ないだろう。いまいち釈然としないながらも、レアンは息を吐いて肯定した。

「……そうね。わかった。これが空挺で、あんたが獵団の経営者で

あることも認める。これでいい？」

そう言うと、セインは満足したような笑みを浮かべ、改めて問う。

「証拠は示した。あとは君たちの判断だよ。どうする？ 僕を手伝ってくれるか、くれないか」

ここまで連れてきておいて、今更訊ねるものか、とレアンは半ば呆れたが、考え方を変えればこれはセインが寄越した最後の選択肢であるとも言える。

事実、もう一度空へと飛翔することがどれだけ自分の在り方を変えるであろうか——を、レアンは少しだけ思いやった。別に変わるつもりなどはない。しかし、翼をもがれたまま、否、？ もいだま？ 燻っている現状に少なからず虚無感のようなものを感じているのもまた確かである。

(……どうせ、今回限り)

そこまで考えて、結局レアンは思考を切ってしまった。どうせ今回だけなのだから。金が入れば終わり。そう、生きていける金さえあれば——

「いいわ。仕事を受けましょう。ただし相応の報酬は貰うわよ」

今度は溜息混じりではなく、しっかりとした口調で言い放つ。依頼を受けると決めたのだ。曖昧な態度は捨て、プロらしく矜持を顯せねばなるまい。

レアンの堂々とした振る舞いに、今まで傍で黙って俯いていたナ

ギまでもが強く意志を持った眼差しをセインに向けていた。

試した本人であるセインといえば、結局「真面目」と言えるような態度は示さず、底のしれないような笑みを浮かべて恭しく二人の女性に頭を垂れる。

「受諾してくれて感謝する。ようこそ。獵団《碧翼》へ」

さながら社交界でダンスを求めるかのように差し伸べられた手に誘われ、レアン・シュレイフの物語は、多くの運命を巻き込みながら黎明を迎えたのであった。

十、

## 第二話 Selfish lady - 1

「、」

「すごい……」

船内に入って行つて最初に簡単の声を発したのはナギだった。ドツグ備え付け鉄橋を使わず、自動で降りてきた梯子を上っている時までは、その異質さに半ば脅えていたというのに、中に入ってしまったえば数多犇めく機械類に目を奪われ、興味を示している。レアンはその適応能力に感心して溜息を洩らした。

「ナギちゃん。君、もしかして空挺は初めて？」

セインが視線を落としながら訊けば、

「いえ、この街に来るのに何回か乗りました」

と笑顔で答える。

——そういえば。レアンはナギに詳しい出身地を訊ねていないことを思い出した。かすかに「東の方」と聞いた覚えはあるのだが、いったいどのくらい遠い土地からやってきたのだろう。それが少し気になった。

「へえ、それじゃあ、定期船に乗ったのかな？ 結構高くついただけろつ。大変だったんじゃない？」

大陸のほとんどの低地が住めなくなってしまう、離れた高地にある街同士を繋ぐものが唯一空挺のみとなった昨今、個人の空挺を所有できない大衆のため、当然公共の空挺——決められた都市の間を行き来する定期船というものが当然出現してくる。便利な移動手段ではあるのだが現状では運賃が割高なのだ。三回も乗り継げば、二月分のレ안의食費くらいは軽く吹き飛ぶ価格になることだろう。

「大丈夫でしたよ。だいたい四回ほど乗りましたが——」

ナギが指折り数えて回数を示せば、レ안의眉が痙攣する。乗り継ぎに使った金だけでも、《レッドライダー》の修理が出来るかもしれない。それも釣り付きで。

「いずれも貨物室に運びこまれる寸前の木箱に潜り込んで行きましたから」

そして次ぐ爆弾発言に、大人二人は硬直した。  
貨物に紛れて乗船……。それはれっきとした密航というやつだ。  
万が一見つかった場合は、その船の責任者の決定によって、いかなる罰でも受けなければならないことが、航空条規によって定められている。

「ナギ、あんた……。いや、なんでもないわ。今更どうでもいいわね」

「大人しそうに見えてなかなか大胆なことをするなあ、君は。いやはや、驚いたよ」

レアンは何か言いたげであったが、ひとくちふたくちもこもごと

口の中で呟いただけで閉口。セインも笑顔を忘れて驚いている。ナギはそれがどういふことかイマイチわかっていないらしく、閉まりなく口を開け広げて二人の様子を見ていた。

「御父様から教えていただいたことなのですが、なにかおかしかったのでしょうか、姉さま」

「……気にしないでいいから、もうそれはやっちゃだめよ。いい？」

「は、はい」

なんといふことか、どうやら諸悪の根源はナギの父親であつたらしい。ナギに武者修行の旅をさせるような父親だからと、勝手に厳格な人物を予想していたレ안의イメージが瓦解した。同時に一体どういふ人物があつて確かめてみたいという感覚が生まれたのは言うまでもないことである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7604n/>

---

碧翼の輪廻

2011年10月7日23時01分発行